

センター試験の「冷やかし受験」を止めよう

東洋大学経営学部 非常勤講師
公益財団法人 日本進路指導協会 理事・調査部長

千葉吉裕

平成最後の大学入試センター試験が1月19、20日で実施された。受験者約55万人が厳冬期の日本各地で一斉に試験を受けた。大雪や人身事故などで交通機関の遅延や運休に受験生が巻き込まれないか、心配しながら当日を迎えるのは、受験生本人だけでなく、その家族や高校教員、塾・予備校関係者、運営に関わる大学関係者、大学入試センター、文部科学省、会場関係者など、とても多くの人たちがいる。695の試験会場で同時に公正・公平に試験が実施できていることは、驚異的と言っても過言ではあるまい。

このような大イベントに、全ての受験生が緊張感をもって臨んでいると思いがちだが、実はそうではない。この試験の出来、不出来で合否が決まるのであれば、皆、各試験会場の監督の指示に従って整然と受験するだろう。しかし、現実には異なっている。

SNSをみると、推薦入試やAO入試で入学が決まっている生徒を高校が強制的に受験させているという書き込みが散見される。強制受験は今年に始まったわけではなく、ずっと行われているのだが、近年、強制的に受験させられることに、あからさまに「面倒くさい」「受験する意味があるのか」などと書き込む受験生がいる。試験会場でスマホをしまわずに注意されるのは、スマホを使って不正行為を働こうとしているかと思いきや、オンラインゲームをやりたいたいからといった書き込みも

ある。試験を妨害するようなことはないが、緊張感のない受験生に試験監督が手を掛けているのではないかと心配される。

10年前、「職業研究2009 秋季号」のこのコラムに「一般入試は一般に「あらず」と題して、一般入試を受けずに大学への入学を年内に決定している受験生がたくさんいることを記した。今年度の四年制大学志願者は約70万人、推薦入試、AO入試の四年制大学入学者はここ数年約27万人。推薦入試やAO入試でセンター試験を課す大学もあるが、多くの大学は年内に合否が決定される。センター試験の受験者が55万人と発表されているので、大学の合否に関係なくセンター試験を受けている受験生は10万人以上になる。センター試験の受験生のうち約2割が緊張感が乏しい可能性があると思うと、不安になってくる。真剣に受けている受験生のことを考えて、身の入らない態度の受験生は遠慮してほしいと思う。

特に、今年は、インフルエンザが猛威をふるっており、人が密集する環境では罹患の怖れがある。受験会場は遮音の都合上、換気は決して良いとは言えない。センター試験の結果が合否に関わる受験生は、2月、3月に受験本番を迎えることになる。1月は彼らにとっては体調をくずすことを絶対避けたい気かりな時期なのである。気軽な気持ちでセンター試験に臨んでい

る、合否に関係のない受験はやめてほしいと願っているはずだ。

では、なぜ、高校は進学先が決まっている生徒にセンター試験を課すのだろうか。それは、普通科高校の教育が大学受験準備を中心にしたものになりがちなためである。その問題点を平成3年4月の文部科学省中央教育審議会の答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」の中で次のように指摘している。

「今日では、高校教育はすべて大学進学のためにあるかのような考え方が一部でかなり支配的で、そこでは進学が生徒や親たちの最大の関心事であり、生徒の進学実績を中心に学校を評価するような社会的風潮に誰も疑問を抱かなくなっている。そして、この年齢層の青少年に大切な人間教育や心身の健全な育成が、ともすれば軽視されがちになっている。」

学校は子どもたちの健全な発達を促すところであって、予備校ではない。進学先が決まったのであれば、高校生だからできる社会参加などの体験活動や、放送大学等の講座を見ながらノートレーキングの訓練をしたり、レポートや論文を書く練習をしたり、読書、検定試験への挑戦など、やれることはたくさんある。入学が決まったのであれば、センター試験対策の勉強ではなく、進学に向けた学習にいそしんでほしいものだ。